

繪本
豐臣
勲功
記

初編
五

遠13
2209
5



13 遠
 2209
 卷 5

繪本豊臣勲功記初編卷之五

目録

木下反間謀識山口逆意

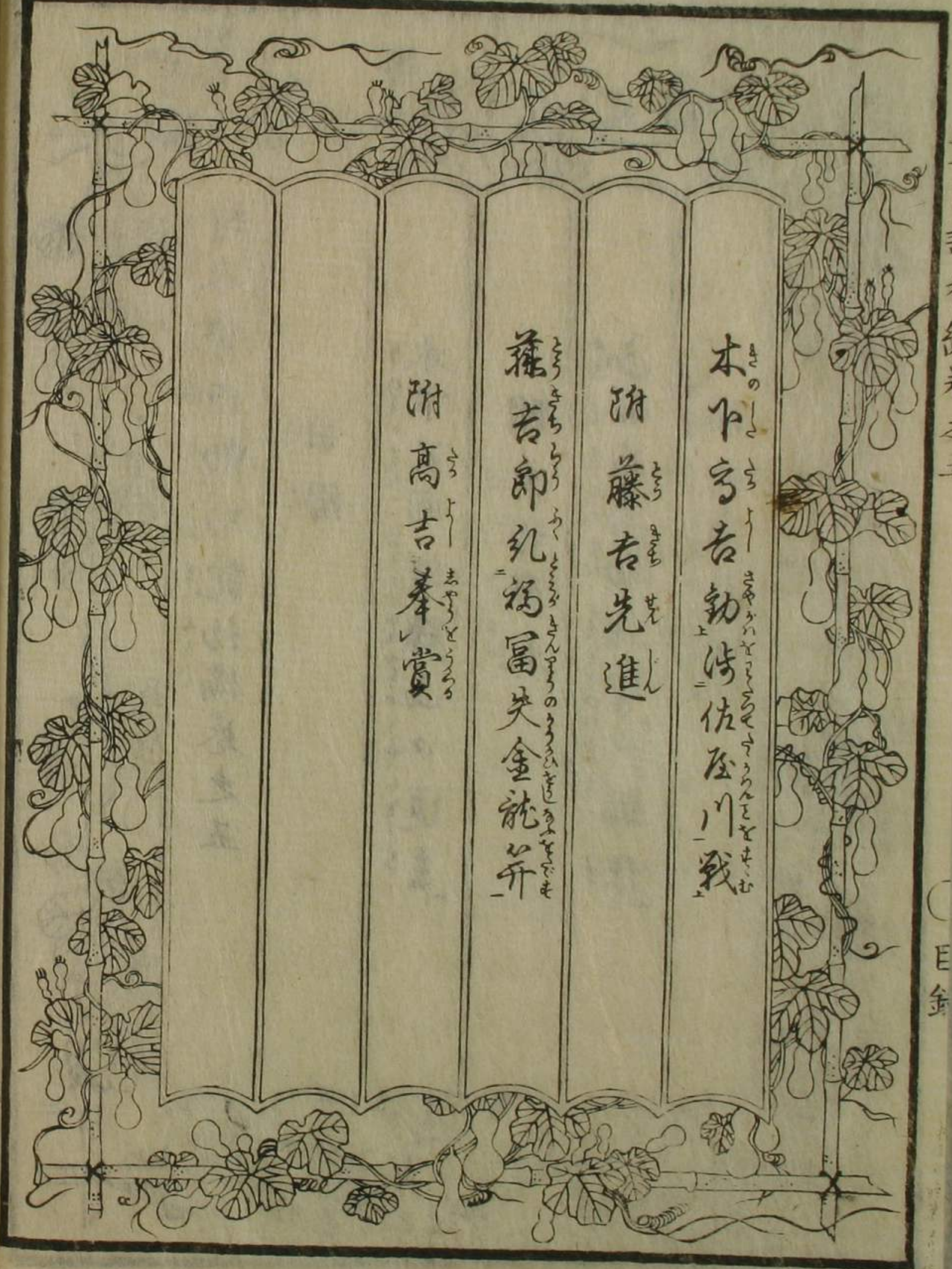
附 戸部我死

山口左馬助悔悟戸部恨

附 北畠軍

豊臣記初編卷之五

目録



本下右右勅使佐佐川我

附藤吉先進

藤吉郎弘福富矢金統并

附高吉奉賞

繪本豊臣勲功記初編卷之五

江戸 櫻澤堂山 編輯

木下反間謀識山口逆意 属戸部戦上死

韜略の所為虚あり實あり歎の謀事と顧慮とる响ハ州木
 風小動くせよ心猜り事小こ七然れど小森ニ尤弟門可成ハ
 方と行南小打扮せ。笠者 戸部が住する多郡小あるはせり
 斗とて古米の智多小備するの秋 智多郡小属一の智多の郡より一里
 ありて古米の智多小備するの秋 智多郡小属一の智多の郡より一里
 得織田家小信長とれと筆者小令し密小戸部が書相と念
 通夜々々小く小蒙をせたる小日と累をせられと書仍一一點一畫
 偽筆と見くねハ信長文句と口寫小く。一封の書と記得させり。
 小文面の卦ハ戸部新左衛門先達既小織田家小為擔し心小政を



豊臣記初編卷之五

懐くされども山口父子の始末を今川義元の幕属に借し
 織田家へ依伏の相違。子息九郎次郎を清洲へ投じ城中の蹠
 蹠を伺を。情を地を義元へ通せんがめふし。努力の圖あり
 べし。然れども自方の計策を用ゆる所も有るれば。皆く弃安し
 べし。倘機會ありしに馬助を差入る。密に酒燕を
 遣ふ。其席に致捉べし。然れば。智多の郡中。城を
 護るを備ねの預計。御自方より久くいさる。縦令義元が國
 大軍を率ひ攻入とも。更におろす所也。此等の討議を構へし
 今暫く少しの渠を察られ玉をさる。中より法を記し。此と真面
 相お記得。當名の織田家の家老。藏米田権六。佐久間右衛
 門。戸部新九郎。つよを賭す文章あり。此密翰亦一封の山口九

郎次郎が密書と添へり。是は山口九郎次郎より父を助へ言賜
 る書翰なり。その文面お綴る意に。世に情お新九郎の密書を
 量りて奪取。遣をを俤お記得。又お新九郎の書翰を
 恭しく革靴お納。針目細密おに綴させ。藤吉郎お令せられ
 山口が使者おお拾せ。直地にお海へ遣へし。多吉原来速歩
 妙をゆいめをそれ。一時未過其内お被滅し到り。尤も助小遊
 へり。山口執事のどじけお。まづ九郎次郎が書翰を閱終り。次お革
 靴の口を解。始終を見らる。五分の發死み分お怒り。定山書を撲
 他と抛着。勝き新九郎が所為よる。天地お驚し。此君恩を忘
 へ織田小荷擔をること。おもも腸断し。然るに今此密書を
 子おおし。これ大なるれ。先九郎次郎へ返書と遣らんと意中密と

書記得友吉郎お是を潜候。我分の病惱をいられど不日金
 快とられれば父が事と煩をを分が用かておせよと言傳へよ亦
 汝ハ辛苦の使大儀ありと考ひたるお七藤吉郎承て暇を告ぐや
 くも清洲へ走返す。お君も初と言状しこれに織田大お脱び
 来日山に戸部が中間より起ると窺ひゆる果して山口にたす助戸
 が書翰と実と信じ。かれ逆賊勝さも無し殊お咄と云ふと
 譎懐と極と憤怒に。這陣行時お捨置られ。と亦お後列へを
 系り。主人義元へお申したるお義元も又大お怒り存られを
 一もせど。戸部を誅戮せよと先んて命じりしに。お妻あり
 陣どもりの山にほつりと伺を巧まを小失織田へお脱せしも。恠る
 変事を宛規在る。御前へお申しせんが為あり。然るうへお子息をバ

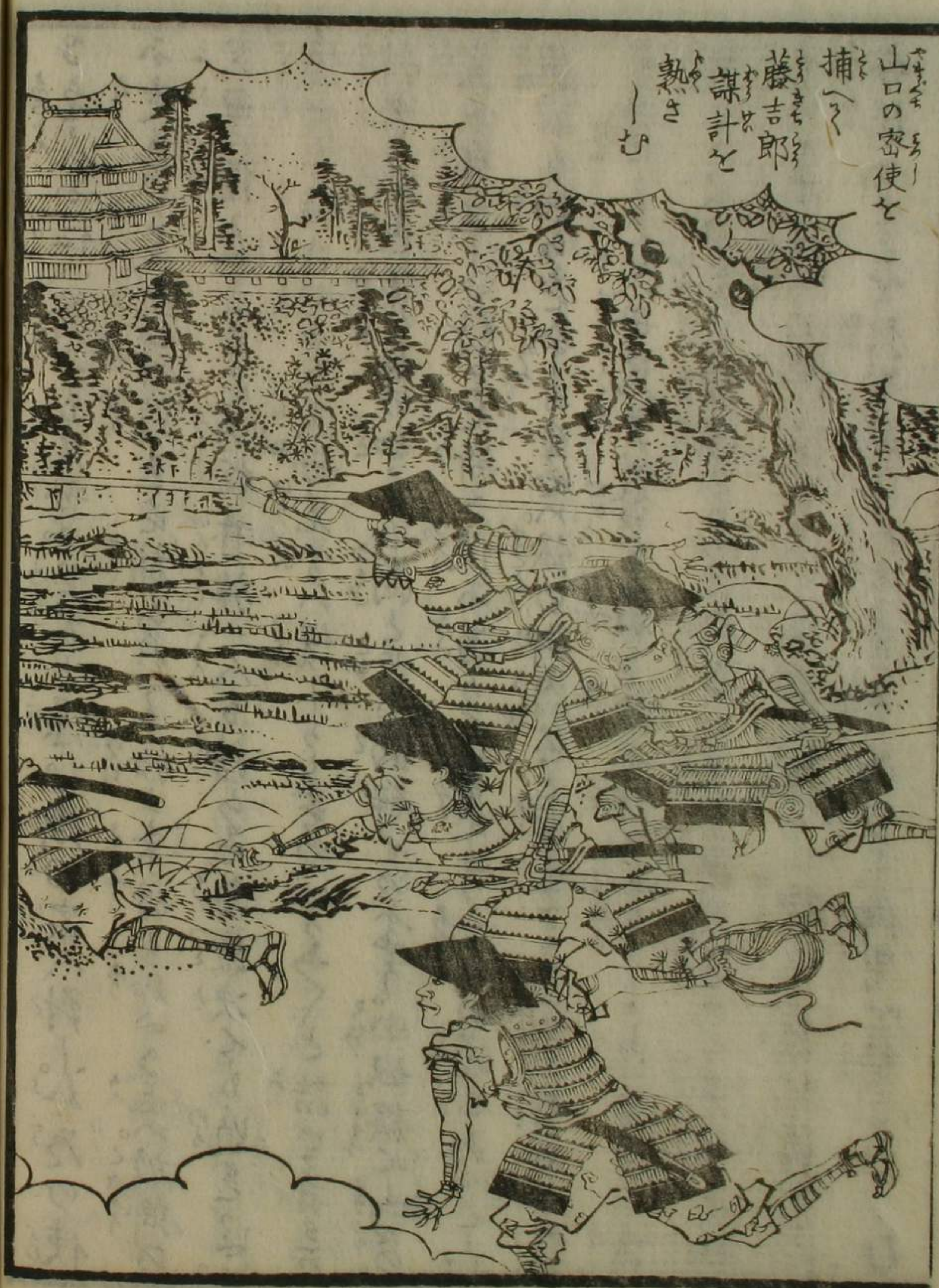
清例よ並こと安うらむお為だ九郎次郎と申候し親子一隊よ
 カと勤せ戸初と敵捕りおまへしと怒り言状をされ義元
 それ右もたも宜し計ひおまへしと課せお山口に起陣し
 鳴海へ還り。お利する驛卒とあり。清例よありたるお子息が許へ
 速めお退去し来り。と密書を齎せ遣し。然るおを日
 清洲へ預く木下が計策とあり。門の出入最度し。率忽お使
 稱えさうし。寸虚と見澄し城内へ入らんと。お君と及友吉郎が知
 せ及する五六の兵卒。即地お山にが使士を授け木下が前小お君
 九郎次郎清例と退去し。鳴海の城に立ち候。親子存し力と勤
 せ戸初新丸門と毆控らんと。符節と合する書面あり木下つ

誦了ん歎ふこと限るなく。然るに方も山口が籌策小松に計らるん
 とこれらの初よ計儀を添く自君へ併お言上。又も九郎次郎が偽書
 を記めたる助へ借送やう。小子いう小も雇間と親奪し清例の城
 と道出べふ類よこれと計るといども。容易小道去ぐ。唯急ぐべき
 戸幼と誅戮するを肝要。倘小子を救えんと遅くも。その内小
 を給まご奈何する謀しん。父の心小禍の起らん。律も量まじ。實よ
 由りて七太款られ。斥時も密く災の根と截。久と書記し。備山口の
 使を喚出。汝ハ何處の者と問。使卒齒の根とあるつせつ。尚國大
 山の云氏と著ふ木下流人なるやう。然るに織田の百姓も。山に九郎
 次郎。素より織田殿の重恩を生れ。うう小交する方とく却ん織田
 殿と殴んと計る。面ハ恰も人小似れ。どむハ獸よなる。方より汝も斯

る人小仕へ苟小も父母が自君と憑む。織田家へ討し。世乃の使
 小走ま六こそ。天野道を捕られ。う。汝が素姓も知ら上。放郷の
 父母の借よかよむ。六親眷族一人も。抄ら其罪決くも。道まじ。
 道理小味き心小も。父母兄弟ハ傷し。う。い。う。と詰て着ま。
 彼者顔色菁サをの如く。洞と共小勸解てい。小奴誤ん。山にの
 家小な。公。これ。斯る使小。素より自人の逆小あること。
 爰小も知ら。今日。自の御内。存。困。勢。め。り。せ。
 何と。父母兄弟。皆。と。條。小。附。小。安。と。存。せ。べ。す。唯
 預。く。父母兄弟。安。穩。さ。る。べ。し。御。計。以。單。よ。仰。ぎ。せ。ら。る。と。歳。迄。し。伏
 乞。小。木。下。听。ん。然。こ。そ。あ。る。べ。し。父。母。兄。弟。う。汝。等。心。罪。を。道。ま。じ。
 安。穩。の。こ。と。を。祈。り。速。よ。大。公。より。命。属。ら。る。御。用。を。楚。と。つ。と。む



山口の密使と
捕へり
藤吉郎
謀計と
熟き
一ひ



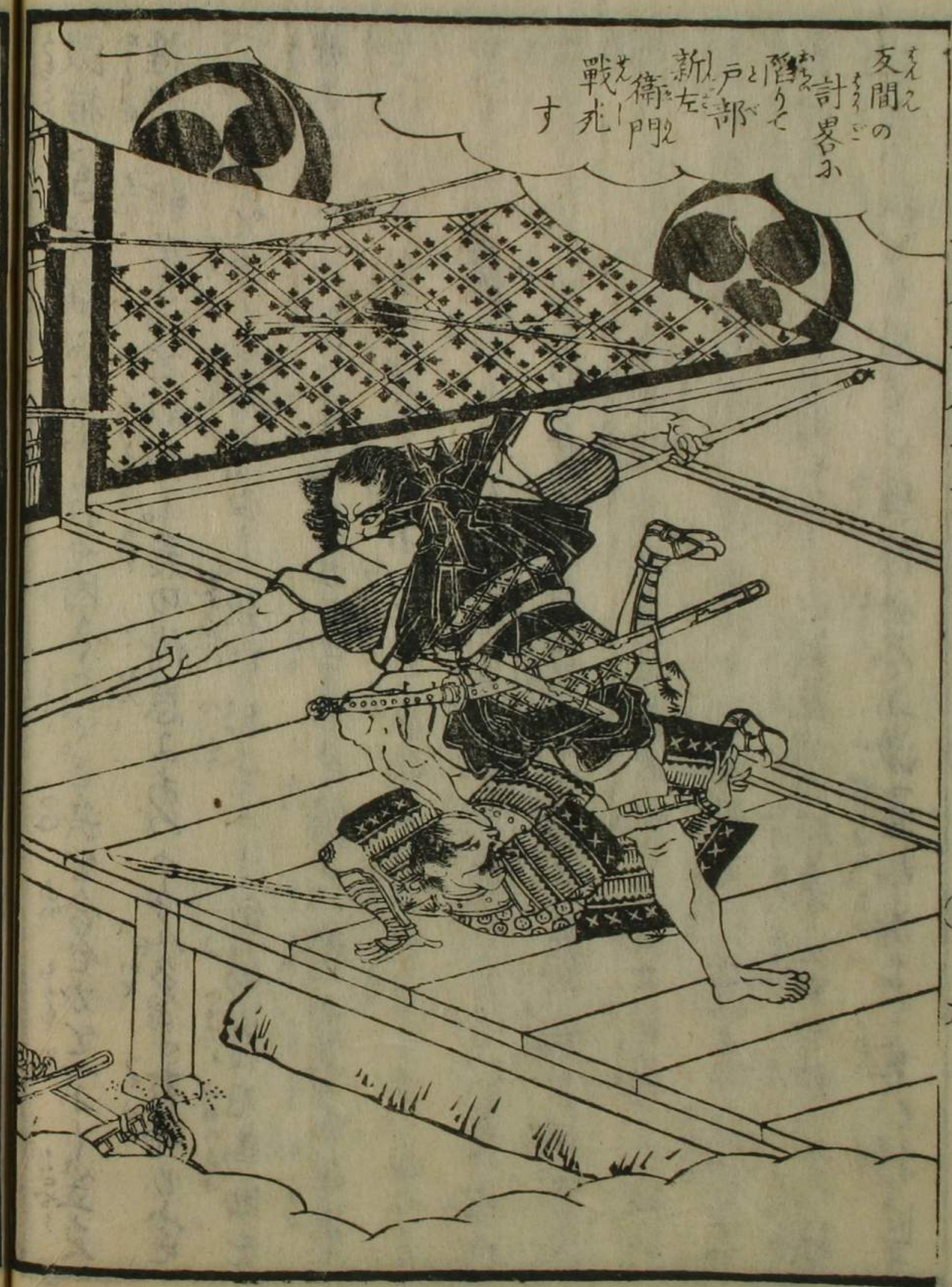
べきや。と問はれん。彼者異議もなく。何とて御用を肖くべし。父母の
 るる。唯唯。安穩なること有らば。乃ち溢りぬる事あり。せよ。
 令小面トク御用を遣せん。命せ。所られ。おそれ。と。言ふ。木下笑を
 復す。叶神妙の稟状あり。然る。遠書と。鳴海へ。持齎す。九郎次
 郎が返書あり。と。たる。趣。速。ふ。あ。り。く。及。郷。へ。退。返。を。其。と。恩
 賞。賜。へ。ん。と。く。わ。め。よ。と。深。切。小。稟。所。尚。日。木。下。彼。者。と。同。道。又。と。く
 大山不到也。渠が親族小番をつひさせ。鳴海へ使ひ遣ち。と。し
 左馬助へ。世書を。え。と。謀。と。あ。ま。り。も。知。ら。ず。先。新。左。衛。門。と。誓。と。り
 べし。と。俄。又。智。多。の。郡。中。小。居。住。り。多。る。今。川。原。の。備。所。と。鳴。海。へ
 招集め。評議しく。ひ。ら。り。や。う。戸。部。新。左。衛。門。が。謀。叛。お。つ。き。既。に。後。府
 の。主。君。より。條。得。と。き。許。し。あ。れ。ど。彼。新。左。衛。門。狡。雄。な。れ。ば。後。便。小

毘捕。と。言。は。れ。し。は。これ。小。因。り。門。と。兵。を。合。せ。力。を。一。か。し。笠。支
 推。踏。し。新。左。衛。門。と。毘。亡。し。君。の。御。恩。を。あ。が。り。ん。多。き。お。登。り。ふ。は
 べし。と。事。を。決。し。つ。準。備。す。惣。勢。約。合。二。千。餘。騎。山。口。左。馬。助。を
 首。お。と。し。永。祿。二。年。四。月。廿。日。申。の。斗。鐘。と。一。齊。小。等。を。推。進。す。
 平地。を。攻。め。採。起。る。了。ゆ。小。智。勇。兼。備。す。戸。部。新。左。衛。門。の。り。と
 の。ど。も。不。言。と。お。ま。り。と。大。に。駭。き。来。款。の。孰。誰。と。言。赴。い。り。小。語。れ
 聞。え。ん。と。い。ふ。も。あ。り。せ。ど。関。風。推。破。し。亂。殺。し。な。れ。ば。鎚。を。被。ぐ。よ
 隙。も。な。く。為。服。の。采。遣。推。把。し。走。出。搦。伏。し。挑。き。合。戦。と。も。款。の
 多。勢。あり。自。方。の。り。り。二。百。人。戸。部。新。左。衛。門。の。猛。進。と。詮。術。な。く。
 出。合。徒。士。食。と。も。小。故。を。受。く。戦。死。せ。り。原。来。世。双。の。新。左。衛。門。一。陰
 才。戈。の。疵。と。も。眉。と。ぞ。縦。横。を。尽。し。激。音。起。尚。る。と。言。ひ。捲。き。す

豊後守 藤原 朝臣 藤原 朝臣



友間の
討畧
戸部
新左衛門
戦死す



来款と山口と見つゝありし獅子憤瞋の声を発し奈何なる意極
 のあればと。憊うそ道と尋止とを呼ぶと所ん九馬助は謀叛露
 とこれに今川殿より速に誅戮せよとの命せり。汝も名ふ小英
 雄もさや。鄙怯の拵さるえんより。名も首さう部又と蒙よ
 と句てし。備へ諛者の所為るべし。今川殿の武運もたれぬ。
 吾初出仕の初より今年四十有二才の今日まで君不對し不忠の
 心と懐きつる。おろくのるき今見。奸人よ名の潔さを掩られ存
 命なく今川家の滅亡せんを見よ。愉く自殺せんと力を翻し
 く後堂へ入。肚控斬くと死つる。嗚呼厥家の亡る則へは。石
 を損とる。直るる。今川義元滅びんとする其叔は忠信を二の
 戸新九郎と自軍の隊おとせし。一軍くも又悲しなり。

山口九馬助悔撃戸部謀 属 北島発軍

一計を行く百計と得と。実よ遠智のつて。処を木下藤吉郎高
 吉。山口父子が反心と察する。却る渠が所行。因に今川の権右
 智勇小富。戸部新九郎と滅し。信長を所し。一儲を
 高吉が二計あり。一卒一矢の費も。と袖小く。一城を。他
 よ。は。と。愛拍に。斯く山口九馬助。戸部新九郎。首
 級を。後列へ。餽遣し。軍の始末と。位伸せし。今川義元。山口が
 軍功の量と。賞羨る。戸部種属と。没却る。妻子親族と。追放
 せり。這ふ戸部が嫡子。小新十郎。との者あり。今年廿二歳。つり。父戦
 死の由と。所後嘆き。夜小紛。是後府と。退去し。名を山林。小。父が
 冤の罪。小。陥し。誅戮せられ。怨め。い。父の。山口と

毘古一。修羅の鬻怒と拂んりのと謀るるを殊勝なり。然るに
 今川家の老臣侘素より戸部の誠忠と知ざる者や。是れ者や。遠次
 のつと不審新左衛門の道と諱らぬ忠と宗とを勿く違ふと云ふ。其
 邪智横行の倫るるは是れを必定倭奸の中と妨る不究なり。我元
 を諫るるは戸部が忠勤を思合を妻子女族と呼返す。其助を
 加へり。其も嫡子新十郎。行先ハ雲水也。水也。知るるは是れ
 因る。後府も九馬助と心懸く。懷者多うなれば何なる。心懸れ
 る。心中文小来り。其鬻くく日と過せり。又清例も上流助。其即
 と情も喝れ。九郎次郎と誅さるる。其官西人。木下多吉堆と云
 渠小誅せ加へり。又九馬助憤怒と懐き義元と時心軍と做さん
 然るれば自雷の突るる。其唯世も小棄置る。九馬助より呼る

へ。九郎次郎鳴海へ。新左衛門と敵する始末も。初れ山口父子
 の者おのれと力を逼後悔なり。後府も容易出仕もする。然る
 ぬ。後回家人真実小傳系する。其又自滅するの二道。其因
 九郎次郎と世傳小助と鳴海へ。其も何量の縛り做す。其
 万一も心と革め。父子共二個の自軍と儲る。其毒藥
 變り良藥と成つる道理も這等也。と言ふ。信長実小然と
 と山口が指他ハ罪させり。借も山口九馬助ハ情も九郎次郎ハ書
 後也。戸部新左衛門と敵する。其後ハ心懸る。其急なりの
 うち小虚を窺い逃ぬれ。と書記する。九郎次郎。戸部と敵する。不審ハ
 晴福也。父の密書の心も。先清例と道出んと其夜情も準依
 せり。後回敵も山口が逃る。其は此の体と。其虚用を

退んぶるとも。大軍容易小退ぐ。故と悔る者亡ぶとのへる金言
 あれば。御賢慮あつまや。と票を小具教頭をたおし。香く
 尾列と懸望せし。首且の緯る。我年来の志。然ども
 自國小事多し。お過ぬること。本意な。ね。信長武威ふり。る
 とも。其家斯波の臣家ふし。を死比す。幕下り。誰ら
 甘く。信長の下。風小立。ことを好まんや。尚家。既小十二代位を
 二品任職へ。大納言。る。名家。渠と。我。討揚。さ。き。あ。ぬ
 ども。仍。ふ。し。く。翦。され。は。終。ふ。芥。瓶。を。用。ゆ。べ。し。渠。倘。威。勢。増。上。し。く
 尾列一國を平均る。容易征伐る。今。取。せん。何。の。日。我。が
 予。を。遣。ま。さ。き。既。小。思。発。る。る。れ。今。更。存。び。ま。ど。じ。只。出。陣。の。伴
 定。せ。よ。と。心。決。し。く。る。る。ふ。と。食。く。世。義。の。意。せ。り。遠。响。を。屋。尾

石見と。姓。藤。原。ふ。し。伊。勢。飯。島。郡。富。永。の。列。と。出。く。票。を。寄。り。信。長。の。質
 猛烈ふし。い。う。る。故。と。怖。る。緯。さ。く。魁。を。競。く。進。む。と。聞。り。其。小
 因。る。愚。素。と。な。ふ。自。軍。の。後。勢。を。背。地。の。大。河。を。推。し。下。り。く。
 尾列へ。征。投。様。伴。と。見。せ。る。信。長。定。む。川。側。小。出。張。な。し。く。軍。を。挑
 ち。ん。遠。响。自。軍。と。二。隊。と。な。し。一。隊。ハ。川。の。東。小。伏。並。一。隊。ハ。川。の。西
 伏。信。長。血。氣。よ。河。を。渡。し。攻。蒐。り。自。軍。の。正。兵。口。を。お。輸。救。走
 ち。ん。然。る。信。長。猶。ふ。余。に。退。来。ら。ん。响。東。西。の。伏。兵。一。駿。小。あ。り。起
 四方を。軍。を。毆。り。の。る。信。長。と。お。捕。こ。と。代。長。の。お。と。擣。り。や。を。し。り。
 信。長。と。ご。ま。お。捕。り。尾。列。一。國。征。を。兵。隊。属。る。緯。氣。ひ。な。し。と。何。涼。し。く。速。く
 ころ。く。小。具。教。頭。大。に。感。脱。あり。ん。是。究竟。の。妙。計。なり。并。由。兵。ハ。神。速。を
 貴。ぶ。と。こ。と。を。い。ふ。る。と。快。く。準。儀。を。し。と。え。其。分。秘。を。せ。せ。ら。れ。り。

新國司具房卿と惣大おと。五千餘騎を率從ぐ佐屋川の遠側
 小陣を張られと正兵と。次更安保若狹を平城天皇の後裔あり八千餘
 騎を從へ。川の東に埋伏せり。借又一隊に藤原孫之助後彦右衛門守
 郡丹生のとおと。八千餘騎日く河内小伏置り。其年冬冬尾の
 ぬお八國司の發率お加らる。惣勢二万一千餘騎勢列飯高の郡
 大河内の城を進發せり。永祿二年四月中旬の梓ふり。二日をお
 せり勢列する。東名の隈おとる。斯と清洲へ使伸しられ。大
 信長大お怒せおひ。意諸懐する梓ふり。伊勢と尾張大河を曳ひ
 滄海を隔られ隣國をぐる遠方より一驛の馬を進められ然ある
 べは所謂なり。然るを伊勢武者剛也遠へ大軍を率く来ること
 未りりて不當なり。予速に絶朝に只一據お追還さん。早々出陣の

準備とせよ。と即時小城中に拘捕され葉田佐久間坂井滝田を
 叔とく勇烈を雙の尾張武者惣勢五千餘騎を率從へ佐屋
 川當に進む程よ。小畠中も佐屋川の岩お膝ぐ使くる。藤原勢
 既より川測まをゆり。然りて遠小陣列る。遠向信長陣頭お出ひ
 川より那向を觀く。され北畠勢五千計旗翻しと勒り。とくくと
 是をえたり。おひ借おを集めく。曰り。北畠大納言。救代勢列
 の國司とく。威勢を國お振ぐ。原來弓馬の家おあり。その旗
 下の諸士も。武勇も勝り。若と听る。只其采地廣く。人
 教の多き。のとられ。怖る。小足ら。と思ひ。方僅又那向の款を
 えられ。其勢五六千。小過へ。分不。お急の小勢。され。躑躅。と有
 べられ。然るも自軍の軍兵。日來。鍛練せ。の。と。と。屢。戦。場。よ

豊臣記初編卷之五



里夫を借
藤吉郎
佐屋川の

豊臣記初編卷之五



中々足固めなり。銅胆肝と鼓吹をりめを。自軍と佐兵小較まば食られ
 一騎當千有り。然られば欲兵百万ありとも。多と怖る小おあらんや。
 速小洗屋川を打浴し愉く一戦なり。尾張武者の勇氣とあめ
 さらん欲一遮もさくぬを逃去らんとて眼前有り。兵倂疾く打浴せと
 指揮しあふと佐久間信盛進出ん言をせやう。开も小田原公家
 より出る。弓矢前の道小疎しとのふとも先程預守府大將軍陸奥出羽の
 大納言頭家卿弱年ふしと陸奥小下向し。累代拜朝の衣冠を
 脱棄朝著との方よ甲冑を被き大軍と率て所小戦ひつあり
 伊勢一團と次徒へ今まに既小十餘世の子孫み洎ぶ其旗下あも
 お慈の勇士なるといひく。斯る戦國小繁昌と云さる。欲と侮て
 辱んたる緯軍議小有と云始危し。況や大河を涉しる。食こそ

款の采地有り方僅小勢小見あるとも。續く勢力由董婿へ一廉忽
 小進とあふすとと稟をせ借よ柴田及井森池田三人世裁小門ト。
 辞をそく諫たれば信長を直入やう。面々の異入一理あり。然るも
 得て此地より出馬し。くれ兵河を涉るとは何と軍の斯と云え
 徒小對陣しと日と費さん程なり。出陣せざる小劣るべし。と稟をせ
 柴田権六勝家君の曰へることなぐ。危き軍ハ是良おのせざる
 どころ遠遭の出陣へ預く期し。緯小ああるを。款の進るとき、
 中々小防戦の準備なし。この好く戦ふ暨くは長陣のる小國中
 の裏あらんも謀ぐ。只世所ハ三千の防禦の兵と涉し。おひ君を
 御帰城あること且と諫めり。小をふと後助心のせ。決せざれば彼
 新来の小様め賢く。けし者有る。小様ハのぐくと唱ふ。ど四方小

高吉の久ざりし。要時をど經へ出来たり

木下高吉勸涉佐屋川戰 属 藤吉先進

隼鷹一顧よく獲るとの久。方僅頃刻を經る隙も木下藤吉郎
高吉疾くも款地を沈視しく自軍の陣へ立戻ると大將信長御覽
しく小様ゆ何とぞ陣中を立ざる快楽られよと召させぬ小藤吉郎ハ
小走まつ。侍君をく蹲まる。織田敵木下小向させぬ以備所の評定
の事と決せを進心戦ふ様やよれ又退く侍君の事や汝が心小計ハ
りせ。異見と听えと回されへ藤吉郎既と拾げ焦る戦場の期ハ
及んで其御評定ハ何様ぞや。進ぐ軍あり。大和あり。疑ひぬ。
且退く款を侍君の事と大なる事あり。快く進ませぬ。と言ふと
柴田大和怒り汝の事なれば。奈も怒ある何と言ふ。我君血氣の勇ハ

信せ。憚らせぬと諸老はこれと諫め侍る。汝一人軍を進め。
る君の御心と惑せぬ。以ての外の楹杵見ぬ。いづれをむ
小利ありて退く小計ハありや。所存辨を借へ听う。と声振らせ
言ふ。藤吉郎莞尔と笑ひ生々活る。お魂なれ。是あり。と魂
あれ。所存あり。臣とあり。君ハ侍る心と竭を忠儀とせ。つと
く。所存を辨せ。七。開由。お島の諸軍勢。尾張の國を斬取らん。
と。退く。出陣せし。の。彼川家。小陣と居。涉らざる。は。豫の。氣あり。
我君これと防ぐ。と。法軍を率ひて出陣せし。直よ。河を。おら
しく。我ふべし。と。直す。を。是。神速の。銳氣。おす。自軍の。銳
き。氣。を。り。ん。佐兵の。猶。豫の。氣。を。敵。と。た。ハ。必。勝。の。勢。あり。討。小。軍。ハ
大。將。の。機。小。固。る。の。なり。我。と。ん。と。回。す。速。に。我。ふ。べし。然。る。小。時。機。を



佐屋川の高論
藤吉郎諸將を
伏し信長よ
渡戦ノ事を勸む

兵初くは隈よ自己が心不任せ。軍を止め得るは是れ成たの所志
 る。即今尾列の勢をりりて伊勢武者小向ふが危くはいつて
 尾列の勢をりりて天下一を敵ふひきまをせん。今日の軍は安泰なり。
 馳馳走るは伊勢武者と危ふくは率返さば尾列勢の降尖
 蹇けん威すましく。表へん敵へ愈々勝るべし。勝るはあつる大軍
 の降尖蹇けん小勢と合さば百戦をたとも百遭破まんは是れ
 退くの災なり。只速く蒐らせ玉ひて二世三小川と推涉し。挑
 戦ふりのるは勢列武者と佐屋川へ斬流しりふをへし。方僅
 川の勢列勢へ五六千小過されども。一万六千の人数をりりて。
 遠地那地小埋伏なり。川の央へ涉り。响伏兵起て敵捕んと計り
 小想違なり。故に自軍の勢を分る。敵の伏兵なり。並る。河の

東西蘆葦の茂隙くは迂進なり。一當あつる程なり。敵の
 計策想違し。自軍の勝利とあることを必熱。それを退陣し
 ぬふとを来りりて物伴なり。日本國を攻めけ。天下を御す
 後らせぬ事。の敵小御思素を廻らせれり。ととこし。も候る
 所なく。辨舌稟くと速うり。素信長は並ふを。敵をん縛
 を思え。藤吉郎が計策を絶妙なりと悦び玉ひ諸軍小
 嚮ふく宜ふやう。汝倚もよく聽つらん。藤吉郎が悦とところ大器
 小し。本意小稱なり。予初戦の軍より。危急を犯し。身を抛ち
 正射小騎をを却し。敵を敵こと教を知り。それを血氣の勇
 りりと嘲弄り。もの有る。と合戦の道へ厥ふあり。今藤吉郎
 が言を如く。軍は唯今の前後小因まり。既予心決り。されは速く

川を推涉し。闘ふべしと指揮せらる。此田已下の諸勇士併藤
 吉郎を憎む倫輩ハ更進ぐ。闘とんとする色も入る。猶
 猜ましく柴田勝家木下お朝ハ汝辨舌斫利ふし。危急の
 軍を進めまいし。自軍を死地小向らしむ。且又款小伏兵あり
 とのりたる。證據をりつと謂也。實は勝べた道理あり誰ら
 それを拒むべき。遠く連る譜代の老臣智勇勝る者あれども
 款の軍累伏兵のありやそれやとあるものなき。汝獨が口賢く
 伏兵ありと言ふ。奈奇怪小所へつ。といふを高吉とある。柴
 田殿の御態ひ然るを有べき。律もなん小臣とて凡夫ふし。天
 通をゆるさふあはれ。居る。款の實否を知らんや。敵小こ七
 猶家が如き。桃き。乃の一得ふ。既小虚實を探り知る。其可謂

いんと是を説く。我君這境へ御意の响款兵の多少を見量り
 ぬれば。悪の外の小勢ある。所縁こそあり。めと存せし。小臣
 獨問伏ふ。涉滯の指南を承所。流頭を涉し。款地小。其
 這陰那陰。と走遠く窺ふ。まづ正隊を情と觀む。其勢
 五千不足ら。丈夫より一里計を隔西と東。伏兵あり。其より
 百歩をりも遠方。目属の木と樹る。早告斗の設あり。
 正隊の軍兵併。那地まで敗走し。比伏兵東西より奮發し。
 自軍を左右より推披。総捲り。返合せ。三方一圖。斬起んと
 謀りし。のふ想違ふ。然れば。款を破らん。律。り。も。つ。わ
 せ。く。ゆ。ぞ。わ。自軍五千の軍勢。まづ三隊に分。伍つ。一隊ハ
 我君二千餘の。御勢を率ひて。正面の。款士小合せ。必

敵兵誑走らん。其响自軍隊伍と立復くと追起ん。目属の
 木まのに到せり。二を三小攻る人。これこそ敵の計策お違
 し。暗号を知りたる暇もあらせざ遠く敵の誑退も立整を
 方術なくし。実の敗北疑ひあり。恐まれバ東西の伏兵も正
 隊の敗走も恐怖し。勿く援救術も知らざ。失趨小逃り
 さん。うくは自軍の勝利する。俸眼前ゆわいと。言は小織田殿
 ちまら。薙く然とて歡馳と。怜ふし。猿冠者多。よくも
 敵地を窺知し。先汝侪も予と懐や。妬まの意を停止ら。是
 藤吉郎が奇計小隨づ。再度の異見も置ぶべし。準備を
 せよと命づるふ。木下依怙の九輩へ。智恵感づる小餘有。
 さくも奇態の名士と。と懐るもあれバ偏執の心を懐く。野士へ。

愉くし。是かひひなぐ。此理を被る小洞なく。瘞く指揮小あさぐ。ら
 乃れ。信長三隊の伍部と決む。その東の一方へ。柴田権六勝家と
 大おと。坂井右を。監中原小市郎。佐々。隼人と。敵と。其隊へ
 一千五百餘騎。東の方小埋伏せし。安保若狭。隊伍と設べし。
 借又西の一方へ。佐久間右エ門尉。信盛と。大おと。遠山甚太郎。林
 藤八。服部小平太。小先魁と。うせ。千五百餘の兵輩。西小伏。る
 勢列勢の。儀田。彌之助。が隊も。蒐と。嚴小と。れと。定めら。は。残る
 二千ハ。大お。信長。赤三。九。門。可成。池田。勝三。郎。信。輝。毛。利。新。助
 秀詮。遠。儕。の。雄。士。と。率。從。へ。伊。勢。の。正。隊。充。少。お。具。房。が。陳。よ
 攻。蒐。ら。ん。と。隊。部。既。よ。定。め。り。な。れ。ど。も。今。日。ハ。未。の。下。刻。る。は。ど。
 明。天。蚤。朝。ハ。川。と。涉。し。推。進。べ。し。と。諸。軍。勢。厥。準。備。と。を。成。り



佐屋川の軍小
 信長兵器を
 藤吉郎に
 賜ふて
 先進を樹心



けり。然る小當夜藤吉郎情々地ノ池田ヶ陣小ゆえ信輝とりん
 言快しき。明天の軍を慮る小主君の向をせおひつ。正面ハ
 必勝しぬれど。西と東小向つ。士々の勢不足あり。よしく御指揮
 あつ。と心を殫しと述らる。是ハ柴田佐久間の五將
 藤吉郎と不快なれば。今日木下が言快せし謀をよくとせむ。
 誤もあらん。と心悩く斯言せり。信長預くられらの降をも
 推量しとあせし。既又奮發んとあふ响柴田佐久間とぞく
 昭よせ正隊具房の取小足ねど。只大事なるハ伏兵あり。あ士よしく
 カと竭し。彼東西を防ぐれよ。其隙ハ正隊を破らせ。自分
 由軍士と共し。御遠侍と合隊あり。操起るりのる。伊勢
 武者らどが騷ぎ。佐屋川へ追追ぎ。壘小しとらねん。只今日の

合戦ハ後陣こそ大事なれ。肝賢鄙怯と奉止。故の若しと交る。
 と宣ひ棄て馬を率よせ。叢山と跨り。川に臨んで見おへ木下
 藤吉郎高吉ハ威系薙断し。鎧と被る。馬小も騎る。窺し
 られ。信長心中小憐とあひ。智謀拔群の木下なれども新参と
 り小多るれば。甲曹さへも首賤ら。馬をさふ免されど。わ
 武者の列小加とろに走廻り。陣のり愛さ。渠が今日の功作を勤め
 ちやと思され。細系威の甲曹小夕顔との馬を添九尺の
 短戟一齋小。これを高吉小賜。遠禮と被。遠馬よあ跨ん。今日の
 先陣勉め。木下。と宣はる小。藤吉郎肝小銘とくあり。ぐく。
 これを拜領。さしあせ。螭龍の雲をゆり。意味呼られ
 し。る快も。河の塗流ハ試安。先や射騎つらまらん。

東五七切編卷之五



十二

木下
藤吉郎
佐屋川を
先進と
自方の
諸勇士を
懋ま
しむ



長一門言不終卷之五

十一

進と多入衆くと木下正頭小騎発つ。勢列勢の未明より己の
 下刻すを待ねれども。川を渉る色も人ね心怠暗るとあれ。
 藤吉郎が引導あり。遙那流の河上より馬を刎とお投く。あ
 ると蹴起進ませつ。深き所へ韁を緩め。既中流へ出るをえく。
 信長諸士を晒りおひ。猿小継けや兵士輩。小猿一個小功名さま
 吁壯兵士予を越せ大張猿へ矮林のれども。大膽不敵のりゆ
 こと。と大なる声お解辞し。おひ河下く河湍お投ると。されん
 一士驅るべし。五千餘騎の清冽勢一駿小突と騎投く。塞地よ
 河お渉し。向の岩お登るや否。鯨音をつらく伊勢武者の指
 面窄しと棚蒐る。北畠の軍兵。遠より敵の渉らん。懐設けぬ
 俸るれば。方々方術の想違し。鳥鏡とて。おたるの。石往

虎往と散れを。恁るところ木下高吉彼夕顔小熱涎ふうせ
 九尺の短戟をお奮く。正真地小鎬蒐る。これ小續々。軍の雄
 士池田勝三郎信輝。赤三丸工門可成。いづれ劣らぬ一騎當千。自己
 おられと駈つらる。伊勢武者これ小辟易し。立脚取次お
 する所へ。と鎗を擲投く。縦横自在小戦。鳥屋尾本
 志。と踏止る。裏に。時分よれと偽走る。然ども織田
 勢預より。密意を傳へ。律るれば。目属の木の立ところ迄。
 隊伍を固め。後くと追蒐へ来せし。目属の木の見えたり
 一。と内應のところなる。各々勵ま。採起よと。指揮
 部伍の鐵より。猶堅固なれば。敵ども。寸隙なし。

伊勢武者要時我ひーが。退色つゝ兵倚遮りぬく。木下存る声烈ま。各遠途を脱ゆる勇之助と。つるふぞ大ねちめ高吉が。指揮ふ隠し律られ。二千の軍勢。面も振らぬ。鎗節間を作り。蒐捲起る勢ひ。千龍巨海。小跳る如く。石虎巖谿を走る。小侶より。嗷呼心木下高吉。正射不駐起。信長遣る推進く。烈火激水の威を。あし。接立られん。大ね具房既小危く。久々する所へ。鳥屋尾本。取返す。必死ふりて。歌中より。具房朝臣を救ひり。身を辛ふとて。逃れを。池田信輝大なるあげ。國司を。留る。咱言を詞を听しめせ。并由昔より。織回家をかひん。遠契列へ。遭も。馬を投る事多る。恨ありて。致仇ありく。致

北畠殿大軍り。織田の領地を棄せん。道小背けること。多し。織田の領する尾張の地。國微るれども。後居る。兵些くども。龍虎小齊。入る。推進する。其時活く。返す。遠連の御命を。甲曹より。員を。大木周章。落馬せし。屋尾本。抱せられ。遠く。四五百引率。大河内を。當り。逃る。路程五六里。其間。太刀武器。小暨を。甲曹より。員を。尾張武者の得と。ぬ。遠响信長。退止を。本の陣場。小渡送。一。射隊の兵を。返す。馬標と。樹を。自軍。漸次走集り。羸戦を。祝し。然れど。柴田。久間の。安保。織田が。埋伏の。陣へ。逆進する。不意と。

うこれに遮る隙なく。器起る。其中へ鬼柴田とも喰まし。勝家。三尺八寸の太刀うち振。奈羅延神の猛威をふるひ。款首を討つこと一百余級。佐久間もこれ小劣らぬ軍。意のまゝふぶんどろく。信長の中央隊も参向。軍の次第を言状なす。

藤吉郎とうきちろう 福富失ふくとみ 金龍きんりゆう 箭やぶ 属しゆ 高吉たかきち 奉賞ほうじやう

白氏はくし 古誠こじやう 小こ 李下りげ の冠かん 瓜田うりた の履實りやく 小眼せうがん 前まへ の理り する。賢愚けんご 也能た 一いつ のく。厥疑そのうたがひ ひあるりのるを。然しか 一いつ 解げ と解げ する。是これ 賢愚けんご のさうあるを。然しか んど信長のぶなが の。這連このあ 佐屋川さやがわ の勝軍かつぐん を。大おほ 小こ 花はな 悦えき 生なま 一いつ する。今宵このよ へ這不このあ 滞陣このあ 一いつ 曉あけ る。蚤朝さうさう 取陣とけ せ。と其準備そのようい とぞ徇まも られたる。這このあ の

木下きのした の堂どう の部ぶ。福富ふくとみ 平右衛門へいゑもん とのりあり。奈守なもり 何なに なる間虚このあ のあやまら小こ や。先代せんたい 拜領はいりやう する。金龍きんりゆう の箭やぶ と。偷ひそ まれらる。穿鑿せんさく されども。或ある 者もの 平右衛門へいゑもん 小こ 劣せう らる。部下ぶか 下した る。藤吉郎とうきちろう の初はつ き時とき より放盪はうたう 小こ 一いつ 一いつ 盗かど と好むと。所造しよぞう びぬ。ま。眼光やうがん 尖と 一いつ 一いつ 盗かど をとるやう小こ 劣せう へ。渠みち と詮議せんぎ 一いつ 試し みる。とひ小こ 然しか らる。と平右衛門へいゑもん。藤吉郎とうきちろう を叔しやく と。部下ぶか のりのをよひ集め。然しか 体たい の一いつ 一いつ 謂い けるやう。咱しん 失しつ ひ。金龍きんりゆう の掃枝ほうし の。故殿こてん 秀しゆ 咱しん と御賞ごじやう 義ぎ ありん。授賜じゆたまひ りのるれば。秘藏ひざう 小こ 劣せう する。大おほ 切き らる。且かつ 這このあ 器き を偷ひそ まし。人ひと 預あづか り。吾われ 知し つ。其名そのな を當あた ば外ほか も蒙まか せん。器き 小こ 返かへ ざ。穩あん 使し 小こ 耻辱しじやく をもつ。とも他ほか 小こ 劣せう せ。快掃枝くわいほうし を返かへ せ。咱しん の報むく ひ小こ 黄金こがね を

木下の明察
津島の典家
算と探出
偷名と
潔ふと



渠儕が偷取事露まらば罪せられんとて逃ぐるらんが先這
律と言状ぬし急途逃先と存ねんゆの信長の本陣不到
木下藤吉郎私奔し嘗て逃先の知れぬゆその律につきて訴
つた小臣昨夜金龍の掃技と偷まれり。極とせし證起
ぬしとのりども。倘高吉のあつぎる飲御詮下しかりべし
言あつぎと上総助斯の不審成律ふとて藤吉郎が性とし
那許の器を欲とせんや。勿く盗とふ刃と誤ら辱ふ遠ふもの
あつぎとと思さんゆれどもさし當て藤吉郎のあつぎりし
小令とて見聞させんと平右衛門と退と交り池田勝三郎御前へ
出言言しつるや。午過るころ藤吉郎聊用子のあつふよ
津島の里まへ出らんが速くば昨日遅くば夜不入り帰陣
まきさ

堂部なる福富へ。思材ありて知れぬゆのさし。倘御前より御召
あつぎよれ小調時しぬれり。とこのとを思れぬゆなり。と听し
められ信長の然とせあつらん然とせつらん。所由いふゆと高士に
帰陣の程をゆめ小酉尽るころ木下高吉。猜見漢子と仰
信長の本陣へ参候し。池田より言状を。這邊平右衛門
金龍の掃技と失ふる。然るふいつる者小やありけん。藤吉郎
偷と。とのり福富實とぬし。咱を罵る朽憾さ小。斯條
如件くくし。その偷兒を捕へ来り。よれ小披露し玉とれど
言せ池田勝三郎。堂拍ん大お悦び。掲くも計ひぬゆの
然る御前へ訴へん。と信輝即時小御前へ出。藤吉郎が詞の
如く。詳められ言状しければ。信長小も安途し玉ひ其偷兒

禁面せよ。と勝三郎も命せらる。信輝奉命之嚴重よせめとひ
 されば何ぞの隨。招道なして單も命と。赦させぬへと泣伏たり。
 遠駒池田務三郎福富を招よせ。所偷の掃枝とさしつゝ。
 其方失ひし遠置のあつごるや。とりも福富得と。見つ。
 紛きなりとぞ答へり。然らば賊とも賜さるべ奉受せよと答へ
 出とせ。平右五門の心中も定めず賊の木下ならんと思ひみ艱
 せし籠るも今更憫せし詞もなし。斯る所へ本陣より。参候
 せよとの命も福富面目なく御前へ出。信長御も命譲ありん。
 最もあつごるも宣ふや。武士の刀を佩ざる縛の奈何なる要の
 あるりのぞ。と信をせぬも平右五門心おろさる官初と。思へど
 答へざる响い。あしつゝなんといふなく。然らば刀の武士の魂姓

とて。是がさあも一考とあると承り。と言へあつごる上。總助
 苦しく笑をせぬ。かの是もそれを知りつゝよる。武士の魂は
 りのふ。猶安なる掃枝とも。偷するやと知ざる。その力の女危よ
 心のつて。魂とゆへ他も奪は。武道不息と知れり。自家の
 士平が偷しもの。却て外人の罪を負せ。藤吉郎と疑ひつゝ
 條。最寔き心つゝ。證拠な事と訴出へ。裁重もゆへに
 ごと。かのれの魂と他も偷され。耻とかもゆへに。却て
 他をうごめむ。心も。んぢが如き。虚心車へ。修も麻首と極つべし。
 然るど武道も味き。族へ。信長の家ぬ。女と。切へ。日本と
 修行しある。虚心の名を。雪ぐべし。これ追退よと。句を舎
 帷幕の内へ投ぬ。平右五門の恐怖なり。衰へ。池司が陣所も

来り。いろくと勸解をそのひふ。勝三郎も便なくかり人ど。主君
 の怒り宥ぐぬれべ。また時節をゆるすと六ヶ福富詮うなく。主従
 離散し寢浪せり。借信長ハ依屋川の陣を既ハ拂らせ。又
 清洲ハ凱陣ましくん。遠連の勲功を等起諸士某ハ恩賞
 あらふ。先木下藤吉郎高吉と唱出され。依屋川合戦の事
 つひてハ敵の計策を探出し軍を進めて勝利を治る。得實ハ
 汝ハ大功なり。加之先遠く坐るの若を取も。全く其方ハ
 心ハ出く。國勢を佐帮し。これ抜群の奉功なり。人ハ功勞
 ある。賄ハ褒賞なるんをあるべく。先日修理せ。機會くハ
 何ぐりする百貫あり。七をたかへ五百貫と。且織田家の
 舊老木下雅樂頭が家と継ぎ。父の一字と諱名ハあさへく。

秀吉いせよし 秀吉の号を立ちこと六角家へ使者より一時より 草稱老臣の列よ
 加らせ玉ひ新参の辱をまぬくれ。評定の席ハ列座せられ。訴詔の
 詞ハ直ニ伸よと。命を奉り藤吉郎。面目ハあまら恩澤ハあま
 りびを拜謝し。御前ハ退出。家ハ還る。妻ハさうな。男ハ
 又右エ門ハ心ハ大ハ悦び。賀を舒る。緯ハさうなり。然ればハ已来
 木下ハ桃ハゆ梅ハ見寢一りのも。俄頃ハ會釋ハ一つること。
 實ハ小情意よく看えり。然るどハ上総助。伊勢ハ悄悄ハ地ハ
 間者ハつる。事の容子ハ窺ハさる。依屋川の二戦ハ。織田
 家の武勇ハ怖懼。是。荐び耻辱と清めんと。義勢と立る者ハ
 多く。唯信長ハ鬼神ハあ。猶ハそろしと語合つ。こ。若ハ信長
 雀躍ハつ。大ハ関ハ歡笑ハあ。斯ハよ。死時節到来せり。伊勢

武者むしや拳こぶし人ひと尾張おとづを怖おそむ。臆病おくびやう氣味きみの醒さぬら。此方このちやうより推おし
進しんん。北畠きたはたけの一門いちもんを悉ことごとく歎なげ摩まらん。諸老臣しよらうしんを召集めいあめ。いくさ
評定ひやうていありたるや。北畠きたはたけ殿どの先日さきひ予國このくに尾張おとづを歎取なげとらん。と軍いくさを
當的ちやうてきられ、一緯いちちう。近來ちかごろりつて憐懷れんわいなり。然しかども自軍このいくさの勇士ゆうし
づから力ちからを竭つく防ふせぎし。唯ただ一戦いちせん小勝せうかつとほつ。伊勢いせ勢せう却かへり
膽さむを冷ひやし。夜泣よなきの児こを怖おそむとくや。今いま這怖このおそきの抜ぬけら。ち
此方このちやうより推進おししんるべ。よも速すみう緯ちう能あたふま。必然ひつぜん一挙いちきよ小勢列せうりよくを
お破やぶらんこと目前めくげんなり。いろふと宣のたまふ詞ことばふ死し。禁田かきだ権六けんろく
依久いこ間ま右みぎ上うへ門かど。預よく依屋いやく川がはの残のこり。伊勢いせ武者むしやの剛臆ごうおく知しれば。
勇起ゆうきてこれと勸すすめ。快たく軍馬いくまの御準備ごじゆんびこそ。然しかるべしと
言いふ信長のぶなが。あはれをふられと款うかびあひ。其座そのざの評定ひやうてい決きるし。

出陣しゅしんの指部さしべなさんと宣のたまふ。响こたへ木下きのした秀吉ひでゆき参候まゐりまゐり。信長のぶなが近ちかく
召めよせあひ勢列せうりよく攻せを語かたられれば。秀吉ひでゆき謹こまに承听まうり其御軍畧そのごいくさ
る死し不似ふにされ。甚ことごとゆつて然しかるべし。先度さきどの軍いくさ北畠きたはたけ。既すでに
這方このちやうの弓箭ゆみや怖おそむ。荐すすび這地このちへ足踏あしふみをま。唯ただ此際このとき小國こくにを
治さめ。根ねを固かふし。御軍畧ごいくさの要まり。厥しかるく軍いくさをか
あひ。他國このくにへ入いり。福ふく変へん。禍わざはひ。伊勢いせ武者むしや弱よわ
り。とゆども。國くに廣ひろく軍兵いくさ多おほし。数日かずひと費つぎをそのひまふ。足下あしもと
よ。御款ごかんする。唇くちびら亡なび。齒牙おはげ寒さむし。と云いふ勢せう及およ
御ご入いり。當國このくに小款せうかんをほ。其詮そのせんさうふるべし。万よろい一いち
伊勢いせも御ご入いり。愛事いとこと蕭牆せうかうのち。小發せうはつら。臍せきを嘘うそこ
及およふま。遠程とほちやう御國ごくにの態まをる。他國このくにへ御馬ごまを發はつら。甚ことごと

危き時節なりと悟る色なく言伏せり。評議既定ありて。諸士出陣の意備區く其所へ奔吉獨り出馬を拒こ。宜しうとぞと言しければ。座中あつけんくると。柴田依久間大に願せ。藤吉郎が傍若無人今ふ叔めぬ律なぐ。勢州攻を拒む條。りつての外の過言あり。快よと情児を容られん。伊勢の容子を探り知せ。今こそ実ふ次取べし。時節なれば斯ゆべし。軍の評義一決せり。取べし物をとらざる响へ却て天の袂あり。加之君ふの專。御出馬あるべき思起せ。そや某こよ準備せり。それと今更一個ふし。速立たる譎懐さよ。と威猛づる小言なり。信長も怒せかひ。諸老臣も予が意小随ひ。伊勢を取らんと動さふ。某輩一個妨るを奈。とみまごりつと

不當にて。益の詞を費さる。存び出馬を拒さるべし。その分ふ閑きごと。目前稱よぬ起よ。と敦圍く下知されん。柴田と叔木下と平生情と在り。非車よたふし追出ぬ。明日のめく勢列へお發んと徇られん。其準備とせよと。乃るが上総女夜ふ入る。情よ藤吉郎を召出され。閑所容く問せぬ。汝今日出馬と止め。且足下ふ危き事ありと。りふせし其詞材と。信長更お心を好む。明白ふられと所せよと。訊ぬへ藤吉郎。畏伏し言伏し。伊勢攻の事ふつた。君の御説い得ぬも。隙間なく小臣熟く考るふ。當國いゆる平均なりと。君の威光の盛なれば暫く治鎮まといふ。君も月由在ぬとすれば。必定國小交起らん。其足下の危き

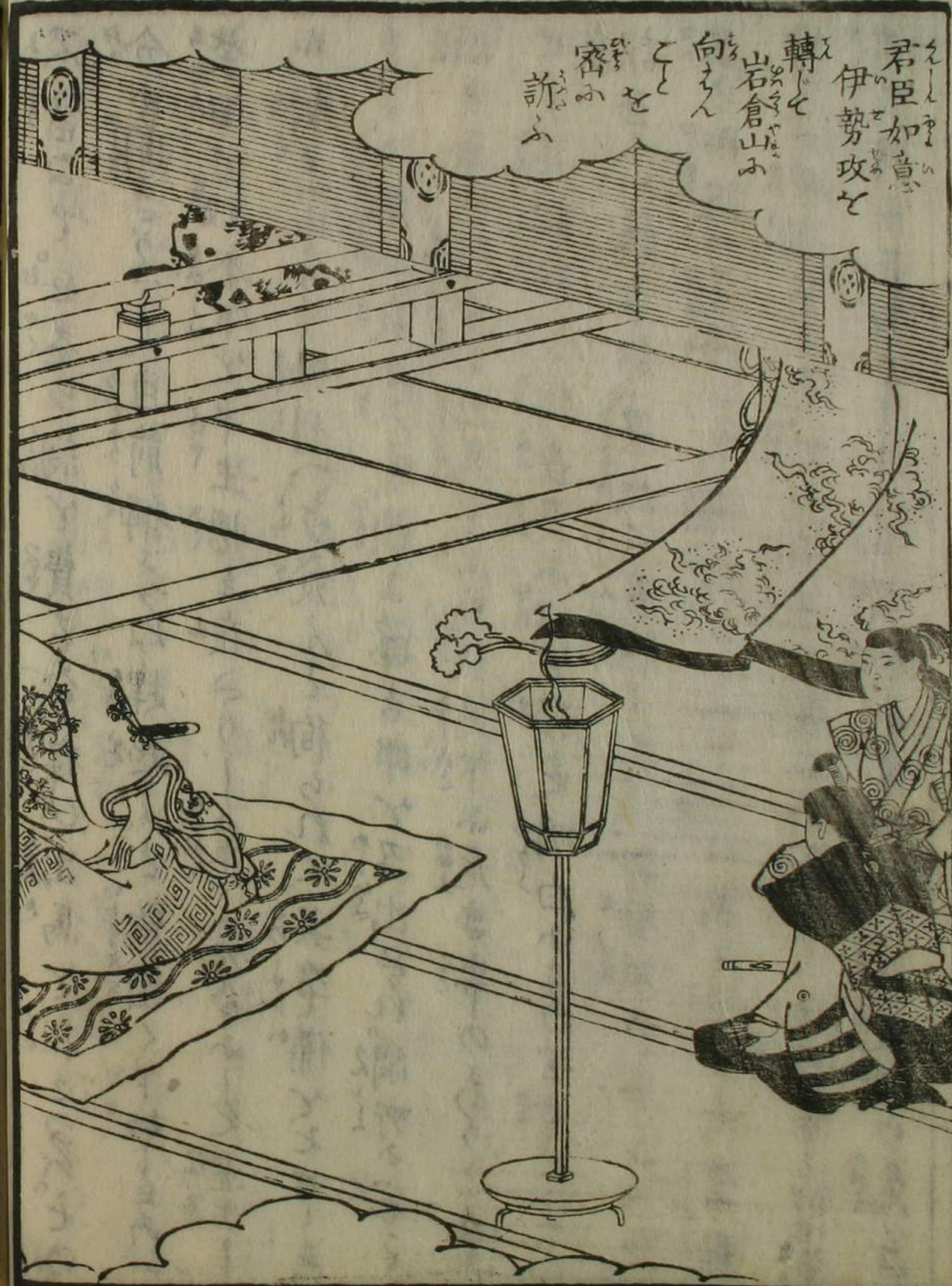
事之巨巴刀編



七三

君臣如意
伊勢攻ぞ
轉て
岩倉山ふ
向て
密に
訴ふ

事之巨巴刀編



事と云は、元頃山口左馬助戸部新左衛門を討つよ。いふも、
 其夫を贖果せ。抜群の擡し。今川義元の疑心と云は、駿府の
 首尾を繕らんと心懸る時節なれば、君勢征と所りの事、
 駿府へ内通し。変をなせと業の内にて、其の事、
 を立んぐ。継ひて謀叛の色見ゆる。岩倉山の城を、津田
 伊勢守信昌信昌の尾羽郡なり。清洲の東北三里あり。津田信昌の臣家
 信秀の信光の次男なれども、信行の味と信長と云は、
 儕。鳴海笠と一致し。御款となり。此儕の兵輩他御を
 窺ひ。二方三方より発起。実小諱く。御大事なり。如き伊勢
 攻と止し。おひ。まが岩倉の御退治。然るべくいふれ。と、
 述り。上総助実理の諫を。然らぬれども、既今日勢州攻の
 評定。明日出陣と徇られ。諸士悉く準備し。今量

ち、那遠と一番螺を、
 の事を止め。大羽の命令。一遭遠。後日。お用。さる
 愁もあらん。遠義といふ。は。と。所。秀吉。笑。言。さ。く
 られ。おひの方。僅。なり。遠。出。馬。ま。り。て。依。屋。川。を。く。お。出
 出。ひ。彼。如。お。御。馬。を。と。さ。せ。く。懸。軍。勢。を。合。を。容。子。を
 見。せ。く。勢。揃。な。り。引。返。し。岩。倉。へ。嚮。せ。お。ひ。の。ま。は。彼。城。中
 の。輩。ハ。只。伊。勢。攻。と。の。を。お。ひ。由。即。ち。確。必。然。な。り。そ。の
 不。意。を。め。く。毆。せ。お。ひ。勝。利。を。得。る。こと。最。易。く。ん。岩。倉。落
 城。つ。ら。ま。り。丹。羽。の。郡。に。悉。く。御。子。お。属。し。め。さ。へ。丹。羽。の
 郡。鳴。海。の。彼。方。款。お。属。さ。る。城。も。破。竹。の。如。く。隊。系。せん
 謀。ハ。密。ら。る。を。め。り。く。よ。と。を。な。れ。ば。老。臣。遠。へ。遠。の。こと。を。

御出馬ごしゅまの后途のちとちう中ふかひて。命あたま听きこられ去いるべしと言いはし信しん長ちやう
 感かんと玉たまひ呼よかりし。此こゝ計かゝ畧りやく且かつ某あつ輩たい今いま去いるべし。缺くわ籍せきの
 態たいふく躲かくき在あり事ことの容よう子しを名なるべし。と命あたませし秀ひで吉よし膜まくら拜まが
 いろおも缺くわ籍せきの小せう屋やくを逃にはく。御ご叔しやくあは。他たの戒かいもいふ
 らん。明日あした御ご馬まを岩い倉くらへ向むかはせあふ其その响ひびも。御ご陣ぢん中ちゆうへ推お系けい
 らし。柴しば田でんとりのく勸こま解げ容ようもえ。と情なさけく池い小せう謀ぼうを謀あ合あせ
 夜よの深ふかく退たい出しゅ走そう宣のたまはる。君きみ臣おみ水みづ魚うおの如ごとく大たい功こうを遠とほく
 响ひびふる。天てん運うん然ぜんらしむるといふも。不ふ思し議ぎをせける
 值ち偶ぐうなり

繪本豊臣勲功記初編卷之五了

